

# ロシア・東欧学会 *Newsletter* No. 5

The Japanese Association for Russian and East European Studies

**「ロシア・東欧研究」  
投稿申込締切 12月15日  
原稿締切 2003年4月30日**

年報編集委員会では、現在「ロシア・東欧研究」第31号(2002年版)の投稿論文等の募集をしています。論文は大会での発表に関わらず、会員であればどなたでも応募できますが、年報への掲載については3人のレフリーによる審査が行われます。論文のほかに研究ノート、書評、資料紹介の原稿も募集しています。いずれも応募の希望締め切りは12月15日、原稿の締め切りは2003年4月30日です。そのほか詳しいことは年報第30号(2001年版)巻末の「投稿規程・執筆要領」をごらん下さい。多数のご応募をお待ちしております。御不明の点は編集委員会(松井弘明)までお問い合わせください。

投稿申込先・原稿送付先

〒355-8501 埼玉県東松山市岩殿560

大東文化大学国際関係学部 松井弘明

Tel: 049-661-1522; Fax: 049-331-1524

e-mail: macchi007@hotmail.com

## 2002年度会費未納者の方に 年会費納入とご寄付のお願い

2002年度分の年会費、あるいは1999年度から2001年度までの年会費の未納分のある方につきましては、この「ロシア・東欧学会 *Newsletter* No.5」といっしょに、郵便振替用紙と、何年度分が未

納となっているかについてのお知らせを同封させていただきますので、その方は、恐縮ですが、未納分もあわせて、年会費を納入いただけますようお願い申し上げます。

なお、一般会員の年会費は8,000円、院生会員の年会費は5,000円となっておりますので、なるべくお早めに、納入いただけますようお願い申し上げます。なお、財政逼迫の状況をご賢察いただき、単年度分のみお支払いの方は、2,000円のご寄付を加えていただいて、一般会員は10,000円、院生会員は7,000円を納入いただけるか、または、年会費と同額の維持会費を納入いただければ幸いです。

また、お手数ですが、郵便振替用紙の通信欄には、必ず「2002年度会費」とご明記ください。ご寄付あるいは維持会費を含む場合には、必ず「2,000円のご寄付を含む」あるいは「8,000円の維持会費を含む」などご明記ください。住所・電話番号・氏名欄も忘れずにご記入下さい。なお、所属先などの変更がございましたら、通信欄にご記入下さい。

## 2002年度第1回理事会

2002年7月20日(土)、上智大学において、2002年度第1回理事会が開催されました。理事会では、2002年度大会共通論題のテーマと報告者についての確認、2002年度大会自由論題報告者の承認と分科会の割り振り、前回理事会以降の入会希望者(9名)の審査および承認、総会に提出されるべき2001年度決算案および2002年度予算案の仮承認、編集委員会報告、事務局報告等が行われました。

自由論題報告者の承認と分科会の割り振りでは、今回の大会では、文科会の会場を2会場とし、各会場で午前3報告、午後4報告の合計14報告とすることが決まりました。これは、会員数・大会参加者数から考えて、同時並行的に実施される分科会は2会場が限度だろうとの考えによるものです。しかしそのため、自由論題報告希望者16名のうち、昨年の大会で自由論題報告を行った2名の方に今回の報告をご辞退いただくようお願いすることになりました。

本理事会で承認された新入会員の氏名・所属は以下のとおりです(申込順・敬称略)。ミハイロバ、ユリア(広島市立大学国際学部)、柴宜弘(東京大学大学院総合文化研究科)、光吉淑江(アルバータ大学大学院歴史学部大学院生)、細田尚志(日本国際問題研究所)、服部倫卓(ロシア東欧貿易会ロシア東欧経済研究所)、柳原剛司(京都大学大学院経済学研究科大学院生)、南野大介(筑波大学大学院国際政治経済学研究科大学院生)、川村清夫(常磐大学経済学部)、安田孝博(神戸大学大学院国際協力研究科大学院生)。

また、事務局より、届け出による2001年度末の退会者10名(梅津和郎、鈴木勇、鈴木武、高屋定國、樺本功、豊川浩一、中西治、畑中幸子、久本三朝男、三宅正樹の各氏)、3年以上会費未払い・無連絡による2001年度末の退会者25名が報告されました。

## 2003年度大会は京都産業大学

2002年10月5日(土)、ロシア・東欧学会第31回大会の場で2002年度第2回理事会が開催されました。理事会では、2003年度大会の京都産業大学における開催の内定、前回理事会以降の入会希望者(4名)の審査および承認、編集委員会報告、会計監事による2001年度決算報告書の監査が無事終了したことの報告、2002年度予算について、事務局報告などが行われました。

本理事会で承認された新入会員の氏名・所属は

以下のとおりです(申込順・敬称略)。諸富学(東海大学大学院政治学研究科大学院生)、楯岡求美(神戸大学国際文化学部)、江口満(創価大学大学院文学研究科大学院生)、山崎博康(共同通信社)。

## 2002年度総会開催

2002年10月5日(土)、ロシア・東欧学会第31回大会の場で、2002年度ロシア・東欧学会総会が開催されました。総会では、2001年度決算報告、2002年度予算案の承認、前大会以降の新入会員の紹介、事務局会務報告、2003年度大会開催校が京都産業大学に内定したことの報告、会則の補足および修正についての承認が行われました。

また総会では、2002年3月に亡くなられた気賀健三名誉会員のご冥福を祈って黙祷がささげられました。気賀健三名誉会員は、1972年のソ連・東欧学会(当時)の創立に際して中心的メンバーとして活躍され、その後、初代の代表理事を1987年まで務められ、本学会の発展に多大な貢献をされました。ここに謹んで哀悼の意をささげたいと思います。

なお、総会で承認された会則の補足および修正は以下のとおりです(ロシア・東欧学会年報『ロシア・東欧研究』2001年度第30号181頁参照)。

### 会則の補足および修正

第13項のあとに、「14. 理事会は年次研究発表会を企画するための企画委員会をおく。企画委員会の組織および権限については、別に定める。」を挿入する。

その結果、旧第14~17項の項番号は繰り下がって、第15~18項となる。

付則の「2001年10月6日」を「1996年10月」と修正し、末尾に、「2001年10月6日および2002年10月5日修正」を加える。

## 第31回(2002年度)大会 上智大学で開催される

2002年10月5日(土)・6日(日), 上智大学で第31回(2002年度)大会が開催されました。

10月5日(土)の共通論題は、「21世紀のロシア・東欧：グローバリゼーションと地域変容(再論)」と題して、次頁のようなプログラムで開催されました。

なお、大会第一日目の10月5日(土)には、次頁プログラムにあるように昼休みに2002年度第2回理事会および全体討論終了後に総会が行われました。

またさらに、総会終了後18:00から、上智大学近くの千代田区麹町の弘済会館にて恒例の懇親会が行われました。懇親会には約80名ほどの会員が参加し、食事やお酒をいただきながら、うち解けた和やかな雰囲気の中で、まさに談論風発、昼間の討論の続きやら意見交換やらがにぎやかに行われました。

### 2002年10月5日(土)大会第1日目

#### 共通論題プログラム

#### 21世紀のロシア・東欧：グローバリゼーションと地域変容(再論)

10:10-11:05 <経済(ロシア)>分野

(座長) 大野喜久之輔(広島市立大学)

(報告) 西村 厚(慶應義塾大学)

「ロシア経済の選択」

(討論) 宮本勝浩(大阪府立大学)

11:05-12:00 <政治(東欧)>分野

(座長) 岩田昌征(千葉大学)

(報告) 柴 宜弘(東京大学)

「バルカンをめぐる政治状況」(仮題)

(討論) 羽場久シ尾子(法政大学)

12:00-13:30 昼休み(理事会)

13:30-14:25 <国際関係>分野

(座長) 澤 英武(元・産経新聞社)

(報告) 角田安正(防衛大学校)

「チェチェンをめぐるロシアと外部世界の関係」(仮題)

(討論) 田久保忠衛(杏林大学)

14:25-15:20 <文学・文化>分野

(座長) 望月哲男(北海道大学)

(報告) 沼野充義(東京大学)

「ポストモダニズムを超えて - ロシア・東欧における文化的アイデンティティの模索」

(討論) 楯岡求美(神戸大学)

15:20-15:30 休憩

15:30-16:30 全体討論

16:30~17:30 総会

18:00~20:00 懇親会

(会場：弘済会館4階宴会場「蘭」)

翌10月6日(日)の自由論題は、午前・午後それぞれ2会場、全体として4つの分科会に分かれて、以下のようなプログラムで行われました。

自由論題分科会では、大学院生を含む中堅・若手の会員による報告に対し、討論者を初めとする会員諸氏による熱心な議論が行われました。

### 2002年10月6日(日)大会第2日目

#### 自由論題プログラム

午前の部・第1会場

(座長) 羽場久シ尾子(法政大学)

9:30~10:30 第1報告

(報告) 千年 篤(東海大学)

「マケドニア共和国の民族問題 - マケドニア危機の背景には民族間の経済的・社会的不平等が存在していたのか？」

(討論) 小山洋司(新潟大学)

10:30~11:30 第2報告

(報告) 安田孝博(神戸大学大学院生)

「ポーランドにおける近年の失業と構造的な問題」

(討論) 田口雅弘(岡山大学)

11:30~12:30 第3報告

(報告) 柳原剛司 (京都大学大学院生)  
「市場移行期ハンガリーにおける社会保障  
制度改革」  
(討論) 水田明男 (大阪外国語大学)

午前の部・第2会場

(座長) 斎藤治子 (帝京大学)  
9:30~10:30 第1報告  
(報告) 大中 真 (桜美林大学)  
「エストニア独立と国際関係 - ポリシェヴ  
ィキ革命とパリ講和会議との接点から」  
(討論) 横手慎二 (慶應義塾大学)  
10:30~11:30 第2報告  
(報告) 河野健一 (県立長崎シーボルト大)  
「NATOによるコソボ紛争介入の教訓 - 政治  
と軍事の視点から」  
(討論) 三井光夫 (防衛庁防衛研究所)  
11:30~12:30 第3報告  
(報告) 細田尚志 (日本国際問題研究所)  
「NATO 加盟決定要因と加盟がもたらすも  
の」  
(討論) 六鹿茂夫 (静岡県立大学)

午後の部・第1会場

(座長) 袴田茂樹 (青山学院大学)  
13:30~14:30 第1報告  
(報告) 大矢 温 (札幌大学)  
「新生ロシアのネオナチ思想」  
(討論) 中村 裕 (秋田大学)  
14:30~15:30 第2報告  
(報告) 小崎晃義 (創価大学)  
「ロシアの体制移行に伴う社会的損傷 - 適  
応症候群と潜在犯罪率の観点から -」  
(討論) 寺谷弘壬 (青山学院大学)  
15:30~16:30 第3報告  
(報告) 堀内賢志 (早稲田大学大学院生)  
「プーチン政権の連邦制改革と『連邦管区制  
』の現状」

(討論) 皆川修吾 (愛知淑徳大学)  
16:30~17:30 第4報告  
(報告) 宮川真一 (創価大学)  
「現代ロシアにおける『ロシア正教ファンダ  
メンタリズム』」  
(討論) 家本博一 (名古屋学院大学)

午後の部・第2会場

(座長) 香川敏幸 (慶應義塾大学)  
13:30-14:30 第1報告  
(報告) 雲 和広 (香川大学経済学部)  
「Soviet Industrial Location: A Reexamination」  
(討論) 宮本勝浩 (大阪府立大学)  
14:30-15:30 第2報告  
(報告) 小森吾一 (日本エネルギー経済研究所)  
「ロシアの対外エネルギー政策: 中央アジア、  
欧州、米国とのエネルギー分野での関係」  
(討論) 左治木吾郎 (東京国際大学)  
15:30~16:30 第3報告  
(報告) 光吉 淑江 (Department of History and  
Classics, University of Alberta)  
「スターリン体制下のソヴェト母性主義 -  
西ウクライナにおける『多子母』奨励策の展  
開 -」  
(討論) 五十嵐徳子 (天理大学)  
16:30~17:30 第4報告  
(報告) 藤森信吉 (国際金融情報センター)  
「ウクライナの議会制 - 大統領との関連か  
ら」  
(討論) 末澤恵美 (平成国際大学)

## 第31回大会の議論から

共通論題および自由論題の午前の部の概要を、  
宇多文雄代表理事、自由論題午前の部第1会場と  
第2会場の座長を務めた羽場久子尾子会員・斎藤治  
子会員に書いていただきました。

なお、共通論題の報告については、各報告者に

より執筆される論文が、来年度発行されるロシア・東欧学会年報『ロシア・東欧研究』第31号に掲載される予定です。

#### 共通論題の概要

本学会では毎年異なる共通論題を掲げてきたが、今回は前回と同じ論題を「再論」として扱うこととした。今まさに問われているのはこの問題であり、とても1回で論じきれものではないので、その課題を別のことばで表現するよりも、あえて同じにすることに意味があるだろう、という判断である。

経済分野では西村厚会員が「ロシア経済の選択」と題して、ショック療法がポーランドでは成功したのに、なぜロシアでは成功しなかったか、また中国の経済移行は成功しているのに、ロシアのそれはなぜ多大な困難を招いているかを分析した。

政治分野では柴宜弘会員が「バルカンをめぐる政治状況」と題し、脱ユーゴ化と「ユーゴ・ノスタルジー」というふたつの傾向にはさまれた旧ユーゴスラビア諸国の現状を検討した。

外交・軍事分野では、角田安正会員の報告「チェチェンをめぐるロシアと外部世界の関係」が、この問題の国際的広がりや複雑性を指摘した。さらに文化分野では、沼野充義会員の報告「ポストモダニズムを超えて」が、この時期の複雑な文芸思潮の動きを「断片」という観点から検討し、伝統的な「物語」を「断片」に解体して真実に迫ろうとする様々な動きを紹介した。

いずれの報告も、ロシアおよび東欧諸国の複雑・多様な現状を分析し、把握しようとしたもので、各会員のこれまでの豊富な研究歴と、最新事情に対する貪欲な吸収欲とその成果を背景にした、聞き応えのあるものであった。各分野の討論者も率直に報告に反論し、問題提起をおこなったので、かなり活発な議論が展開され、共通論題にふさわしい高まりが感じられた。(宇多文雄)

#### 自由論題・午前の部第1会場の概要

ロシア・東欧学会自由論題分科会第1会場では、千年篤会員(東海大学)「マケドニア共和国の民族

問題」、安田孝博会員(神戸大学大学院)「ポーランドにおける近年の失業と構造的な問題」、柳原剛司会員(京都大学大学院)「市場移行期ハンガリーにおける社会保障制度改革」の3報告があった。

千年報告は、マケドニアにおける失業率、教育水準、乳児死亡率、一人当たり社会生産物、に関する社会統計(1986-1995)を詳細に分析することにより、マケドニア危機の背景に、アルバニア系少数民族に対する社会的・経済的不平等がいくつかのケースを除いて基本的に存在しており、それが武力衝突の要因の一つとなったことを、緻密に立証した。

安田報告は、1998年以降のポーランドにおける失業の増大が、需給のミスマッチによる構造的な問題であることを、 $U$ (unemployment)と $V$ (vacancy)の $UV$ 曲線の分析、労働需要分析、労働供給分析により立証し、そこから、若年層、非熟練労働者、地方の高失業率が問題であること、それを改善するため、人材育成システムを充実させるべきという結論を導き出した。

柳原報告は、ハンガリーで1998年に導入された年金制度改革を、年金制度の持続可能性、制度参加のインセンティブと制度の透明性、主体間の公平性の3点から検討し、それが部分的民営化という点では抜本的改革であるものの、公平性や透明性の点で問題を孕んでいたこと、その後のFIDESZ政権の制度修正は、赤字の埋め合わせへの政治的介入であったために、制度の透明性と長期的可能性にさらなるリスクを持ち込んだことを立証した。各報告は、それぞれ現地の統計資料や研究論文を駆使して分析した非常に緻密で水準の高いものであった。

各報告については小山洋司会員(新潟大学)よりマケドニアとユーゴの民族問題の比較分析、田口雅弘会員(岡山大学)より基礎となる失業統計データ検証の必要性や分析結果と実情との整合性の問題、水田明男会員(大阪外国語大学)よりロシアの年金制度からみた特徴と差異、などのコメントが出され、フロアからは、岩田昌征会員より

マケドニアの少数民族政策の問題点、丹羽春喜会員、宮本勝浩会員より安田会員の分析モデル（UV曲線）の改良に関わる諸提言、家本博一会員、小森田秋夫氏よりポーランドと他の中・東欧諸国の社会保障制度の比較等、緻密な各報告に対して、活発・有為な意見、提言がつきつぎと出され、時間が足りなくなるほどの盛況であった。

（羽場久子尾子）

#### 自由論題・午前の部第2会場の概要

第1報告・大中真（桜美林大学）「エストニア独立と国際関係 ポリシェヴィキ革命とパリ講和会議との接点から」 報告は「ロシア革命直後のエストニアの独立過程を、一国史研究ではなく、国際関係史の手法によって分析しようとした」ものである。公刊された英米ソの外交文書を用いて、ポリシェヴィキが軍事力による解放から交渉による講和条約締結へと転換した経緯、連合国がパリ講和会議でエストニアの独立を好意的に扱いながら、微妙な政策の食い違いがあるものの結局バルト諸国の独立を防疫線として利用した、と同時にバルトもそれを逆手にとって、連合国に国家承認を迫った経緯を報告した。討論者・横手慎二（慶応大学）国家の独立は近現代史においては国際関係の中でしか捉え得ないことは当然である。伝統的外交史の手法をとるならば、エストニアの独立をめぐる balance of power がどのように成立したのか、という視角が必要ではないか。

第2報告・河野健一（県立長崎シーボルト大学）「NATOによるコソボ紛争介入の教訓 政治と軍事の視点から」 報告はNATOの空爆について、

空爆の合法性と違法性をめぐる議論 政治解決の努力は十分だったか 政治目的を達成したか否か なぜ地上軍を投入しなかったのか 民間人の犠牲と民生施設の攻撃 武力介入で民族紛争は解決したか、に論点をしばって検討したものである。結論として、武力には限界があり外交に代わり得ないこと、人道的介入のルールが必要だが、国連の承認が前提となる。介入にはロシアを含めた協調外交と多面的な支援体制がとられ

るべきであると論じた。討論者・三井光夫（防衛研究所）コソボへの軍事介入を政治と軍事との関係という視点から見ると、1999年3月を分岐点と考えられるのではないかと。政治的解決の努力は十分なされたとは言えない。地上軍の投入についてはマイナスの効果のほうが大きいのではないかと。

第3報告・細田尚志（日本国際問題研究所）「NATO加盟決定要因の考察と加盟後の課題に対する一考察 チェコ共和国の事例を中心に」 報告はNATO加盟について、冷戦後の安全保障環境の変容に応じて、西欧文化圏への回帰という理念的要因と、民主主義の促進と軍備の近代的装備や軍需産業の振興という現実的要因が絡み合って希望的観測に満ちていたことを分析し、加盟後コソボ紛争への空爆への参加を突きつけられて初めて軍事同盟であるための負担受容の認識にいたるまでの落差を政府、議会、軍、軍需産業に関するチェコ語の資料を用いて検証したものである。この経験をNATO加盟候補国が教訓とすべきだと述べた。討論者・六鹿茂夫（静岡県立大学）チェコの教訓といっても、第二次加盟候補グループは加盟が先決で、加盟しなければグレイゾーンに取り残される、という思いが先行し、加盟によるギャップを予測する余裕がない。ハンガリー、ポーランドではギャップは認識されていないのか。（斎藤治子）

### ロシア・東欧学会事務局

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1  
上智大学外国語学部ロシア語学科（上野俊彦）  
Tel.: 03-3238-3978; Fax: 03-3238-3951  
e-mail: t-ueno@hoffman.cc.sophia.ac.jp